

## 令和4年度 第2回千葉市スポーツ推進審議会議事録

1 日 時 令和4年12月21日(水) 午後2時00分～午後3時30分

2 場 所 千葉中央コミュニティセンター101会議室

3 出席者 (委員)

小川直哉会長、本澤英雄副会長、上田日登委員、五月女重夫委員、高橋薫委員  
馬場宏輝委員、林田義久委員、吉澤裕子委員

(事務局)

神田生活文化スポーツ部長、内谷スポーツ振興課長、伊橋スポーツ振興課長補佐、  
飯山担当課長補佐、堀越主査、前田主査、内山主査、田口主任主事、松本主事、野  
崎保健体育課長補佐、森崎主任指導主事、内藤公益財団法人千葉市スポーツ協会施  
設長、能瀬主査

4 議 題

(1) 報告

ア 地元アスリートの支援について

イ 部活動の地域移行について

5 議題の概要

(1) 報告

2項目の報告を行った。

6 会議経過

開 会 午後2時00分

【伊橋課長補佐】それでは、定刻になりましたので、ただいまより、「令和4年度第2回千葉市スポーツ推進審議会」をはじめさせていただきます。本日の進行を務めます、スポーツ振興課の伊橋でございます。よろしくお願いたします。なお、本審議会は千葉市情報公開条例により、公開することになっております。本日、傍聴者はありません。なお、会議終了後、議事録の作成、議事録の確定を行い、開示されることとなりますので、あらかじめ御了解ください。それでは次第に従いまして、はじめに、小川直哉会長にご挨拶をお願いいたします。

【小川会長】皆さんこんにちは。委員の皆様におかれましては年末のお忙しい中、第2回スポーツ推進審議会に出席いただきまして誠にありがとうございます。サッカーワールドカップもアルゼンチンがフランスを破り36年ぶり3度目の優勝ということで幕を閉じました。残念ながら日本は目標の8強入りはなりませんでしたが、強豪のドイツ・スペインを破り夢と感動を与えてくれました。また、プロボクシングでは井上尚弥選手がバンタム級で4団体統一の世界チャンピオンとなり、アジア人としては初めての快挙でございました。なお、国体は2年連続コロナで中止となっておりますが、3年ぶりに栃木県でいちご一会とちぎ国体として開催されまして、ご存知のとおり栃木県は海がありませんので、セーリング競技が稲毛ヨットハーバーで開催されました。私も大会顧問ということで参加させていただきました。そして今月の9日には千葉市政令都市移行30周年記念ということで、市民会館におきまして2012年ロンドンオリンピックのボクシン

グミドル級金メダリストである村田諒太さんの講演会を開催しましたところ、定員の倍近い市民の皆様の応募がありました。トップアスリートに対する市民の皆様の注目が非常にあるということを改めて認識した次第です。本日は報告事項が2点ですが、そのうちの部活動の地域移行については前回の審議会でも委員の皆さんから様々なご意見を頂戴いたしました。また、つい先ほどスポーツ庁より発表がありましたが、国の方もこれについてはまだ混乱しているようですけれども、そのあたりも踏まえまして、後程事務局より説明があると思いますが、委員の皆様方の貴重なご意見を賜りたいと思います。本日もよろしくお願いいたします。

【神田部長】本日はお忙しい中お集まりいただき誠にありがとうございます。また、日頃から千葉市のスポーツ行政にご尽力いただきまして誠にありがとうございます。さて、2022年も年の瀬になりました。今年のスポートを振り返りますと、カタールW杯での日本代表の活躍と盛り上がりは記憶に新しいところですが、本市においても千葉ロッテマリーンズの佐々木郎希投手の完全試合、千葉市をホームタウンとするプロバスケットボールチーム「アルティリー千葉」のB2リーグ昇格、ジェフ千葉レディースの皇后杯準優勝、千葉市ゆかりのアスリートであるボクシングの堤駿斗選手のプロデビュー、パラスポーツフェスタちばやジャパンビーチゲームズフェスティバル千葉2022の開催など、多くの明るいニュースがありました。さらに、4月には世界最大のアクションスポーツの国際競技会「X Games Chiba 2022」がZOZOマリンスタジアムで開催され、フクダ電子ボードエリアが蘇我スポーツ公園内にオープンするなど、ストリートスポーツも大きな盛り上がりを見せております。このようにアスリートたちが活躍する姿は、市民の心を明るく照らし、子どもたちに夢を与え、スポーツに注目が集まり、スポーツを始める重要なきっかけになったのではないかと思います。本日は、本市におけるスポーツの未来をより一層明るいものにするべく、昨年度ご審議いただきました「地元アスリートの支援」、そして「部活動の地域移行」につきまして現在の検討状況を報告させていただきます。本日もよろしくお願いいたします。

【伊橋課長補佐】それでは、これからの進行につきましては、小川会長にお願いいたします。

【小川会長】それではまず、「議事録署名人」についてですが、先程、進行の方から説明がありましたように、本審議会は会議の公開がされているわけでございます。議事録の確定方法につきましては、「あらかじめ指名された委員」による承認にしたいと思いますが、よろしいですか。

【各委員】<異議なし>

【小川会長】それでは、議事録署名人として、吉澤委員にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【吉澤委員】<了承>

【小川会長】それでは、会議次第に従いまして、進めてまいりたいと思います。最初に、報告事項(1)の「地元アスリートの支援について」、スポーツ振興課よりお願いします。

【スポーツ振興課職員】<資料1により説明>

【小川会長】ありがとうございました。それでは地元アスリートの支援につきまして何かご質問ありますか。

【小川会長】ひとつ疑問ですが、オリンピックではプロアマ問わず出場しますが、プロの方も対象になるのでしょうか。

【スポーツ振興課職員】難しいところですが、競技によりましてプロの考え方が異なり、例えばライセンスのようなものが必要な競技がある一方で、自称で名乗れる競技もありますので、プロを

対象とするかについては今後の検討材料としてまいります。

【五月女委員】このようにトップアスリートやトップアスリートを目指す人を支援するということはとても良い取り組みだと考えております。この制度は、千葉県で支援されている方は千葉市の支援制度は受けられないのか、それとも重複して支援を受けることが可能なのでしょうか。

【スポーツ振興課職員】千葉県制度の兼ね合いについては現状決めきれておりません。例えば同じ領収書を県と市双方に提出するということはできませんが、県の支援を受けている選手が千葉市の支援も受けて、県と重複しない経費について支援を受けることができるかということについては今後検討してまいります。

【五月女委員】限られた方が対象になると思いますので、そうしますと市町村の支援を受け、県の支援も受けるという2本立ての可能性もあるということによろしいでしょうか。

【スポーツ振興課職員】はい、可能性としてはあります。

【小川会長】他になにかありますでしょうか。

【各委員】なし

【小川会長】それでは報告事項（2）の「部活動の地域移行について」よろしくお願いたします。

【飯山課長補佐】<資料2により説明>

【小川会長】ありがとうございます。ただ今の報告についてご意見等ありましたらお願いします。

【小川会長】一つよろしいでしょうか。ご承知のように部活というのは体育系と文化系がありますが、協議会はこの2つを同じ土俵で両方並行して協議していくのでしょうか。

【飯山課長補佐】必要に応じてスポーツ系と文化系でわかれることも検討しております。

【神田部長】補足いたしますと、協議会としては一つ、その中でスポーツ部会と文化部系というようなイメージを現状持っております。

【馬場委員】昨年度の中学校におけるモデル事業はどうだったのでしょうか。

【保健体育課職員】令和3年度に大椎中学校で陸上競技部を対象に、近隣で活動している土気アスリートクラブという陸上クラブがございましたので、そちらの団体に指導を依頼し3回程度指導を行いました。コロナの影響で何回か中止になってしまった関係で、回数は多くなかったのですが、近隣の昭和の森公園を使用し、1回2時間から3時間程度で行いました。対象生徒や保護者に行ったアンケートでは肯定的な意見がとても多く、主な内容としては、専門的な指導者に教わることがすごく良いという意見や、元々学校の校庭でやる活動が多かったのですが、施設面で芝生のグラウンドで走れますので、施設面で好意的に捉えている方がいらっしゃいました。一方不安の声といたしましては、学校の部活動ではありませんので、ケガや事故が起きた際の緊急連絡体制に対することや、今回は近隣の顔の知れた指導者でしたが、もし知らない方が指導者として来た時に、どのような指導者なのかかわからないことへの不安もいくつかありましたが、概ね満足度の高い結果が得られたのが昨年度の結果でした。

【馬場委員】謝金は個人から集めずに市が負担したということによろしいでしょうか。

【保健体育課職員】そのとおりです。

【馬場委員】質問ではないのですが、個人的には部活動の地域移行には反対派で、土日は単に休みにすればよいのではないかと考えております。どこかの人が来てくれるのであれば、そこに子どもたちが行けばよいだけで、クラブに入るなど、スポーツをやっているところに自分が選んでお金を払っていけば良いだけであり、土日の地域移行には基本的に反対です。やらないという自治体の声があっても良いのではないかと考えております。平日の地域移行も視野に入れていると思いますが、平日の地域移行は無理だと思っています

ので、やるのであれば例えばスイミングなど塾に行くような感覚の地域移行をしなければ無理ではないかと思えます。私は市原市の方もお手伝いしておりますが、市原市では土日のモデルと夜間のモデルを作ろうと考えておまして、大学のアリーナに18時半や19時くらいにプラスαでスポーツしたい子集まれというような、部活動ではなく子どもたちのプラスαスポーツをする場を提供する、「今日部活がやらないのでそこのスポーツに行っておいで」という感じのモデルを大学でやろうとしております。学校が終わってすぐ部活ができるというのは子どもたちにとってメリットですが、それを地域で受け皿を作るとするのは無理だと思えますので、夜であれば例えばママさんバレーやおじさんたちのフットサルの延長で地域の子どもたちを受け入れることは可能だと思っております。15時16時17時といった時間帯の地域移行は、私は破綻すると思えます。結局はお金を払える子だけが出来る部活動や、強くなるための部活動にしかならないと思っているので、あまりいい未来はないのではないかと個人的には考えております。

【五月女委員】私もよろしいでしょうか。先日、関東ブロックスポーツ少年団の指導者協議会における研究大会の中でも話題になりました。その際にお話しされたのが、20年30年後に「そういえば部活というのがあったね」というような話の時代になるでしょうと。私は椿森中で部活をつくり、道場で子どもたちを受け入れて、まさしく今やろうとしていることを20年以上やってきてはおります。これは、私が自分で道場を持っていて、学区に道場があり、かつ母校でもあり、サラリーマンではないので時間の融通がつくため授業のお手伝いもできるのですが、指導者や先生方が自分の生活を犠牲にしてまでそちらをやっていると、自分の家庭が崩壊するなど、様々な面が出てくるのではないかと思えます。現在、椿森中では引退した3年生も含めると38人部員がおります。約300名の全校生徒の中で1割以上が合気道部におり、その子たちが道場に来て、道場の会員のお弟子さんがそれ以上にたくさんおりますので、「学校も来てるのね」で済みますが、5人10人くらいで会費を納めているような中で、いきなり学校の生徒が押し寄せて部活なので無料でできるという、会費を納めている方たちは「何なのだろう」という風に思いかねないのではないかと思えます。土気アスリートクラブの方も、学校の先生がやっているのだからモデルになるとは思いますが。しかし、もっと別な角度で考えていかないと、お手伝いはいくらでもしますが、今やっていることを他の人たちにも負担を強いて、「土日受け入れてください」というのはちょっと乱暴なような気がします。また、受け入れ側のキャパの大小によっては、受け入れ側のグループ自体がなくなってしまうような、存続に関わる可能性も出てくるのではないかと思えます。学校は、「開かれた学校」とは言いますが、学校のお手伝いをしている中で、問題を抱えている子どもたちもおりますので、あまり開きすぎて外部の人を入れてしまうと、様々な問題がでてきてしまうのではないかと思えます。すごくデリケートな問題だと思えますが、個人的にはお手伝いいたします。しかし、2、30年後には、「そういえば昔部活ってあったね」という時代の方が先にきてしまうのではないか、これがだめになってという心配はしております。以上です。

【高橋委員】大椎中の件で質問ですが、学校外で指導をしたということで、例えば、学校外へ行く子どもたちのバス代が掛かるとすれば、それは自己負担でしょうか。校外学習のような形になるのかもしれませんが、そこに対し誓約書を書くなど事前の手続きはあったのでしょうか。

【保健体育課職員】事前の手続きはありません。

- 【高橋委員】そうすると部活動ではないという括りで自己責任ということでしょうか。
- 【保健体育課職員】居住地から会場まで歩いていける距離ということもあって、その場所を選定したということもあります。これが離れてきますと、公共交通機関を使わざるを得ない課題はできますので、考えていく必要があると思います。
- 【高橋委員】今回は3回ということでしたが、3回だと指導されている方もしている方も結果が見えづらく、イベントのような形で終わってしまう気がしますが、本来は何回実施する予定だったのでしょうか。
- 【保健体育課職員】10回から20回の間くらいの回数は当初予定しておりましたが、コロナの関係で、できなくなってしまったということころです。
- 【高橋委員】もし20回実施した場合は20回分の謝礼を行政が負担したということでしょうか。
- 【保健体育課職員】はい。
- 【五月女委員】保険についてですが、学校の保険を使えるのでしょうか。
- 【保健体育課職員】昨年度の土気の件では、部活動ではなく地域クラブ活動としての活動となりますので、日本スポーツ振興センターの災害共済給付の対象外となります。もちろん学校管理下外となりますので、別途スポーツ安全協会の保険に加入して対応する形でした。
- 【五月女委員】私が部活動職員ではないうちはスポーツ安全協会の保険に全員保護者に手紙を出して年間で保険に入り、立場が職員になった時点で学校の保険に変えましたが、地域移行の場合は保険料が発生してくるということでしょうか。
- 【保健体育課職員】はい、学校管理下外になってしまうと別途保険に加入するという手続きがどうしても必要になります。
- 【高橋委員】気になる点としては、怪我や移動の間の事故に対して本当に責任がとれるのかということところが大きく、今回大椎中で実施された形であると、自分たちで保険に入らなければいけないということ、もう一つは、部活は教育活動の一環で子どもたちの心身の成長や健全教育が部活の中にはあったと思いますが、地域移行して我々のようなところが実施すると、教育とは離れていってしまうので、単にスポーツの技術を教えるということになっていくということがあります。もちろん、教育をしないわけではありませんが、学校の先生のように教職員資格を持っているわけではないので、そうした部分から離れて行ってしまふことで良いのか、受けることになった時にそこまで責任が持てないということ、そういった方針をはっきりさせなければ、やはり教育的な要素を残すとなった際に、例えば指導者の中に教職を持っている人がいなければいけないのか、そういったことも出てくるのではないかとということが大きな不安点です。
- 【馬場委員】種目によっても異なると思います。私は専門が水泳ですが、水泳の部活はほとんどないと思います。学校の部活で水泳に取り組んでオリンピックに行くということはほとんどなく、籍は学校にあるがスイミングクラブで朝から夜まで休みの日も練習し、合宿もやって試合をするという子どもたちは部活のことをよくわからないと思います。インターハイの時だけチームを作って出るだけという感じなので、トップを目指すようなスポーツというのは体操やフィギュアスケートもそれで良いのではないかと考えております。子どもたちの教育を含めた、体力・運動能力というのは種目を限定せず、できる範囲のことを各学校でやっていけば良いと私は思っております。種目単体の部活を地域に移行したり、地域の人に受け入れてもらうということははやめた方が良いのではないかとと思います。スケートボードや自転車のような部活がありえない種目も既にあり、そうしますとお金のある人しかスポーツできないのかとなりますが、今すでにそうですので、そうではなくお金のない子どもたちでも体力をつけたり、運動能力を高めるなど、種目を

取り払った運動の機会を、学校が終わった後に1時間校庭と体育館を開放するからみんなまで遊ぼうという感じではよいのではないかと、そうすれば種目や指導者の問題は解決するのではないかと思います。

【上田委員】先ほどの謝礼金の金額は1回あたりいくらになるのでしょうか。

【保健体育課職員】部活指導員の積算単価というものがあまして1人1時間1,600円になります。

【馬場委員】それでは生計建てられないですね。

【上田委員】土日はまだしも放課後そのためだけに費やすとなると、危惧するのは、最初は情熱があっているかもしれませんが、結婚などで続けられなくなると、大学生という話も出てくると思います。大学生は4年生でどんどん入れ替わるので、毎回指導者が変わるなど、安定して質を確保することができないので、個人的には平日は難しいのではないかと思います。土日の外部指導員を経験したこともあります、平日に顔を合わせていないのでコミュニケーションが取りづらく、双方手探りで難しいと思います。一番楽なのはクラブチームにやる気のある子どもたちがくることだと思います。クラブの方針に保護者が納得していただいて来てもらうことが一番やりやすいと思います。部活の方の受け皿としては、放課後に時間を開放して体を動かすという仕組みにしていけるのが良いのかなと、専門的にやるのであれば、お金はかかってしまいますがクラブチームという感じになっていくのかなと思います。1時間1,600円ですと、人が集まる種目とそうでない種目がありますので、人が集まらない種目は厳しいのかなと思います。

【林田委員】仕事柄各地を転勤することが多く、新潟に居た時に少年サッカーを教えておりました。小学生までは部活ではない少年サッカークラブで教えていて、中学になると急に競技力が落ちます。田舎なので私立の中学高校が近くに無く、公立の学校ですと先生がうまく教えられない、顧問という名で管理するだけしかできない先生のもとでは競技力が伸びないということで、少年サッカーのコーチの一部が中学も一緒に見ると申し出まして、中学の練習もサポートするようになりました。部活は部活として、先生が顧問で居ながら、土日の大会などもコーチのOBが同行してお手伝いするというボランティアで中学校を盛り立てていました。やはりボランティア精神の強い人がいないと長く続かない性格の団体でしたので、いずれ地域で同じようなサッカークラブができると、そちらに人が流れていってしまい、中学高校も公立の学校の部活としては競技力が落ちていきます。最近の話では、中学校ではなんとか一つの中学校でチーム編成ができるが、高校では一つの高校では対外試合ができない人数になってしまっており、高い競技力が望めるクラブの方に移行しており、小学校のサッカーをやった子はみんな中学校高校で地元のクラブを目指すようになってしまいました。そのような事がありますので、中学校のような切り替え年代に入った時は、ボランティアがいる競技・地域であればできるかもしれませんが、ボランティアで支えてくれるような人が複数いて、5年10年単位で引き継がれていく組織になっていかないと難しいのではないかと思います。やはり少ない人で支えようと思っても、その方たちも老いてしまいますので、活発な子どもたちをうまく育てるためには、教える側も体力が衰えないように若返りを図りながら、組織を活性化し続けるようなサポート体制ができる地域、人の支えが得られればいかなと思います。国はそのような事を絶対的にやろうということではなく、恐らく教師の方たちが平日の放課後や土日に時間を割かれることを何とか軽減してあげることだろうと思いますので、やはり一部の人だけではなく、地域全体がそのような支えの人たち、できれば公務員の方たちがなるべく働き方改革を進めていただいて、残業をしなくてよい体制になれば、そういう方たちに積極的にボランティアとして応募していただけたらと考え

ております。

【吉澤委員】今年、私どもの団体では、お台場学園という小中一貫校の授業で、ビーチバレーを4時間だけ担当いたしました。部活動を移行するという点に関して、子どもが少ない学校も多い中、競技によってはチームが作れずに部活が成り立たないなど、色々とバラツキがあると思います。ビーチバレーというのは個人競技でもありますし、地元の資源である海辺を持つ地域でしたので、愛郷心の育みの一環として、裸足スポーツで運動能力の低下を少しでも阻止するために、裸足になって体を動かすということを目的として、裸足になって地元の良さを知るといった教育的な意味も考えてのスポーツということで授業の中にいただきました。そうしますと、皆が平等に一つのものを経験できますし、きっかけにすぎませんが、50人の中から1人興味を持ち、そういった施設のある学校やクラブに行くという選択ができる環境づくりとなります。部活はどこの地域も課題が多いと思いますが、子どもの運動能力の低下や、スポーツの推進には必要だと思いますので、授業の中で幅広い種目を体験できるような仕組みからスタートしても良いのではないかと思います。

【高橋委員】本来は令和5年度からスタートするという点になってきたかと思いますが、5年度からスタートするのは厳しいという状況であるという理解でよろしいでしょうか。

【飯山課長補佐】はい、そのとおりです。

【神田部長】恐らく、来年度はモデル事業という実証実験的なところを拡大するという点と、同時並行で協議会を設置し、実際に運営するための受け皿探しについて地道に取り組むしかないと思います。民間事業者等へのヒアリングも行っておりますが、教職員の方へのアンケートも並行して行っていくという形になっていくと思います。

【小川会長】1週間ほど前に、NHKでも来年度に伸びるというような報道されておりましたよね。

【神田部長】そのような報道もありますが、教育委員会の方で国に確認いただいたところ、そのような方針はないと否定していたとのことでしたので、我々はガイドラインに沿って進めるという認識でおります。

【本澤副会長】基本的な部分で私が考えていたイメージと違うのですが、部活は学校単位で行われており、そこに対して例えばどなたかできる方がそっくり請け負うという形と聞いていたのですが、図をみますと、学校とは異なった場所へ移動して行うというようなイメージもありますし、基本的にはどちらを狙うのでしょうか。と言いますのも、例えば大会がある場合、それに対して、野球で言いますとピッチャーキャッチャーで連携を練習するといったことが行われておりますが、子どもたちの都合で場所が変わると、バスや電車で移動となり、ピッチャーが行けないといったケースも想定されます。そうしますと連携ができず、各学校で集まった人たちで練習することとなり、試合を考えると全く異なったものができてしまいますし、レベルアップにもならないと考えますが、基本的にはどちらを目指そうとしているのでしょうか。

【内谷課長】一言で申し上げますと、地域の実情に合わせて地域で考えるという状況です。例えば野球において、一つの学校で9人揃うような学校は今までどおりで良いかもしれませんが、3校4校集めなければ人数が集まらないということであれば、連合チームということで特定の学校で練習するのか、普段は部活として各校で練習し土日のみ合同練習とするのか、そういったところも正直分らないという状況です。現状でもそうした学校もありますし、千葉市の中で統一した方針が出せるかと申しますと、千葉市の中でもエリアによって地域性が全く異なり、地域の中でもローカルなところでどのようにスポーツを支えていくかということは難しい問題と考えております。

【五月女委員】アンケートについてはスポーツ振興課やスポーツ協会からいただいておりますが、文化部の方もアンケートをだされているのでしょうか。またどういった機関に出しているのでしょうか。

【飯山課長補佐】現在、文化系に対する同様のアンケートも準備しております。

【神田部長】文化系の休日の部活で一番心配しているの吹奏楽です。合唱なども少しございますが、その他の文化系の部活はあまり休日まで活動していないのかなと思います。特に吹奏楽については学校に楽器を置いてありますので、多様な組織・団体が主体として実施する場合、楽器を持つての移動ができるのかということも問題になってくると考えております。吹奏楽の指導者がどういったところにいらっしゃるのか、どんな団体にアンケートをお願いしたらよいのかということは悩ましいところです。市の外郭団体では文化振興財団がありますので、そういった機関を通じて団体に聞くということになるかと考えます。

【小川会長】文化系の動きにつきましては、次回の審議会でご報告いただければと思います。

【小川会長】この問題は非常に難しい問題で、少子化が進み、部活の顧問の先生は朝練もありますし、時間外手当もありませんので、千葉市だけで解決できる問題ではなく、国の方もぶれているようにも見受けられますが、引き続き動向を見て、審議会ごとに逐次進捗状況を報告いただきますようお願いいたします。

【小川会長】その他、全般的になにかございますか。

【各委員】<なし>

【小川会長】それでは以上で報告事項は終了いたします。ご協力ありがとうございました。それでは進行を事務局にお返しします。

【伊橋課長補佐】小川会長議事進行ありがとうございました。それでは、これをもちまして、「令和4年度第2回千葉市スポーツ推進審議会」を終了いたします。

閉 会 午後3時30分